あゆみ通信

VOL. 141
あゆみの会(真宗大谷派大阪教区第２組同朋の会推進員連絡協議会)
会　長　浪花　博
広　報　本持　喜康

第2組合同報恩講ご参集を

真宗門徒にとって「報恩講が大切」と言われるのは何故だと思いますか。

「報恩講」とは宗祖親鸞聖人の御教えに遇い、聖人の御恩を感じて生活する人々が、年に一度その御恩に報いずにはおれない気持ちをもって集う報謝の集いです。（中略）

親鸞聖人の教えによって、「生まれた意義と喜び」を見出し、この人生が空しく過ぎない真の喜びを知らされ、日々の生活に本当の意味での張り合いを感じて生きる人々にとって、勤めずにはおれない報謝の集いを持つことは当然でありましょう。言い換えれば、この人生に「報恩」の生活を見出し報恩の生涯を尽くして生きる身となった人を真宗門徒というのであります。

親鸞聖人のご命日を縁として、改めて教えを聞かせていただき、今生きていることの尊さを明らかにする。このことが親鸞聖人のご本意に応(かな)うことであり、同時に私自身の本当の喜びであります。日頃忙しくかけずり回っている私たちです。平生お寺にご無沙汰の人も、せめて年に一度の報恩講には親鸞聖人と真向かいになって、「何のために生きるのか」自身の生き様を問いつつ、じっくりと聖人の教えに耳を傾け悔いなき人生を見出していきたいものです。そして、子や孫、友人達にまで真宗教(真宗）を伝えていこうではありませんか。

(本多恵「教化センター通信」64から）

第2組報恩講案内

日時　11月12日（木）午後2時
会場　即應寺（阿倍野区阪南町）
内容　お勤めと法話
講師　藤井　善隆先生
　　(即應寺　前住職）
会費　500円
参加申込　お手次のお寺へ
　　11/5までに
その他　消毒など、ソーシャルディスタンスに配慮して開催しますが、第3次感染等拡大の際は中止となります。参加の際はマスクを着用ください。無理をされずにご参加を。

第2組聞法会開催

2020年9月30日(水）午後2時から、天王寺区の稱念寺(岸野龍之住職）において、コロナ禍の中、今年最初にして最後の聞法会「共に学ぶ正信偈」が開催され、組内の住職、寺族と門徒、推進員26名が参加しました。

折から会場は、入口に消毒液が、本堂はソーシャルディスタンスによる配置と、講師と聞く側の間には透明スクリーンが設置され、万全の態勢で行われました。

講師は新田修巳先生(第4組正業寺）をお迎えして行われ、天親菩薩の「世尊我一心　帰命尽十方　無碍光如来(2面へ）

親鸞のことば

二つの恩徳に感謝し、人生を歩む

如来大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし　師主知識の恩徳もほねをくだきても謝すべし

本願に救われ念仏する身となった親鸞の感謝は、二つのことに向けられています。一つは「如来大悲」、これは私たちを救おうとする」阿弥陀様の慈悲のはたらきです。もう一つは「師主知識」、これは阿弥陀様のはたらきを教えとして私たちに伝えてくださったお釈迦さまや諸先輩を指します。前者を救主、後者を教主と言われます。親鸞はこの二尊の恩徳に感謝し、人生を歩んだのです。

（名古屋別院「人生を照らす親鸞の言葉」から）

禍転じて福となす

昔からのことわざである。今ほど身に染みて感じたことはなかった。

今年、早々から降ってわいたコロナウイルス感染騒ぎで、日本中が震撼した。

我々の日常生活も一変し、医者通いと買い物以外は、巣ごもり状態が続いた。

大切な仏法の教えに出会えなくなり、愚痴や不平不満を繰り返していた。わずかに朝夕のお内仏前でのお勤めで何とかと、思ったある日、そうだ。これまでのあゆみ通信をもう一度読んでみようと思った。それが済んだら、今度は。これまで買っていた真宗の先達の先生方の本を読んでみようと考えるようになった。たびたびの医者の待合室で池田勇諦先生や延塚知道先生、信国淳先生、金子大榮先生、児玉暁洋先生、宮城顗先生に和田稠先生等等の本を分からないまま、読んだ。ひょっとすると、奥底の法蔵さんが、「お前のできることを考えたら」と、勧めてくれたのかも。合掌。（本）

（1面から）願生安楽国」から「無碍」について、日野原重明先生（1911-2018、聖路加病院名誉院長）や、寺島実郎氏（1947-、評論家、多摩大学学長）そして曽我量深師や松原祐善師などの言葉を紹介しながら丁寧にお話をいただいて、聞法会を終えた。

如是我聞

新田修巳先生の法話をお聞きして

佛足寺　細川　克彦

新田先生は、ほぼ一年ぶりとなるご法話で、初めに天親菩薩の「願生偈」の中の「世尊我一心　帰命尽十方　無碍光如来　願生安楽国」の「無碍」について話された。

「無碍」ということは、障りがないということであるが、私たちは死を免れることができず、したがって生老病死の事実に苦しんでおあり、障りとなっているのではないか。生死の障りを乗り超えていくにはどうしたらいいのか。求道の一番の大きな問題である。それは、「二河白道の譬え」の中の**「我今回（か）えらばまた死せん、住（とど）まらばまたしせん、去（ゆ）かばまたしせん」**という三定死の状況である。

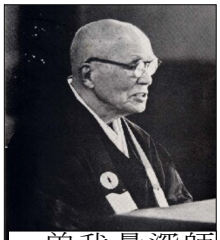
先生は105歳で亡くなられた日野原重明医師の「死をどう生きるか」という本の中で、医師になった頃16歳の少女がどうしようもない病気のために死んでいこうとする日の朝、ベッドの上に正座し、

先生に向かい冷静な態度で、それまでの治療に対して礼を述べ、また母に対して礼の伝言をして亡くなっていった話に感銘を受けたと。

死をどう乗り越えていくか。死は悪いことではない。死とはこの世と縁が切れていくだけのことである。仲野良俊先生は「死は解散や」と言われた。生老病死という課題がきちっと解けない限りは、障りとなり、魂は死んでいく。それは、死を受容してしか乗り超えられない。そういう道を「帰命尽十方無碍光如来」と教えてくださる。

先生は「教行信証」行巻より、**「一道は一無碍道なり。（無碍）は、いわく、生死すなわちこれ涅槃なりと知るなり。かくのごとき等の入不二の法門は無碍の相なり」**（真宗聖典194P）を引かれ、安楽国に帰っていくいのちを今ここにいただいたのだということを「帰命尽十方　無碍光如来　願生安楽国」のお言葉に込められていると思うと話された。

休憩後再開された中で、先生は「帰命」ということについて曽我量深師の著書「地上の救主」より、**「如来は我なり」「如来、我となりて我を救いたもう」「如来、我となりてとは、法蔵菩薩降誕のことなり」「法蔵菩薩とは、如来を念ずる帰命の信念の主体である」**を引かれ、「帰命」は誰がするのか。私ですよね。しかし、私がするなら、少しでも長生きできる方に帰命するでしょう。法蔵菩薩が私に帰命しましょうと無理に帰命させ、ヨタヨタしながら引きずられて、



曽我量深師

帰命することになるのではないでしょうか。生老病死を超えていく道をそこに発見することができるのではないでしょうかとお話いただいた。終わり。

あゆみの会総会案内

日時12月13日（日）
午後1時30分～
会場　即應寺
（阿倍野区阪南町）
内容総会（事業報告、会計報告、事業計画、予算案、役員選出など）
記念法話
講師藤井前隆先生
（即應寺前住職）

その他
2021年の会費（2000円）を受け付けます。
お斎はありません。

予告2021年

第２組第36回同朋大会

釈　徹宗先生

日時3月6日（土）
午後１時30分～
会場難波別院御堂会館
4階Aホール
内容　勤行と記念法話
講師　釈徹宗師
（　相愛大学教授・浄土真宗本願寺派如来寺住職〔池田市〕）
参加費　1000円
（記念品有）

如来、我となりてとは、法蔵菩薩降誕のことなり

曽我量深